

湯原王のまた贈る歌一首

六三八番

ただ一夜 隔てしからに あらたまの 月か経ぬ
と 心迷ひぬ

娘子のまた報へ贈る歌一首

六三九番

我が背子が かく恋ふれこそ ぬばたまの 夢に
見えつつ 寝ねらえずけれ

湯原王のまた贈る歌一首

六四〇番

はしけやし 間近き里を 雲居にや 恋ひつつ
居らむ 月も経なくに

娘子のまた報へ贈る歌一首

六四一番

絶ゆと言はば わびしみせむと 焼き大刀の へ
つかふことは さきくや我が君